

フランコフォニーとは何か (4)

——フランス語と英語が共存する国々について——

長 沼 圭 一

1. はじめに

カナダがフランス語と英語の2言語を公用語とする国であることはよく知られている。カナダの他にフランス語と英語が共存している国にはどのような国があるであろうか。また、これらの国々においてはいかにして2つの言語が併用されるに至ったのであろうか。

2. 多言語国家について

フランス語と英語が併用されている国としては、次の国々が挙げられる¹⁾。

カナダ
ドミニカ国
セントルシア
バヌアツ
カメルーン
ルワンダ
セーシェル
モーリシャス

全部で8ヶ国あり、うちカメルーン、ルワンダ、セーシェル、モーリシャスの4ヶ国がアフリカの国である。これら8ヶ国のうちフランス語、英語ともに公用語となっているのは、カナダ、バヌアツ、カメルーン、ルワンダ、セーシエルの5ヶ国である。ドミニカ国、セントルシア、モーリシャスの公用語は英語のみである。

では、このように1つの国の中で複数の言語が使用される、いわゆる多言語国家とは一体どのようなものであるか。多言語国家と言ってすぐに思い付くのは、恐らく既に名前の挙がっているカナダの他、スイス（公用語はフランス語、ドイツ語、イタリア語、ロマンシュ語）、ベルギー（公用語はフランス語、フラマン語、ドイツ語）といった国であろう。日本、フランス、アメリカ合衆国など多くの先進国においては1つの言語が支配的であるように見えるため、多言語国家は珍しい存在であるかのように思われるかもしれない。

しかし、齋藤（2010）は以下のように述べている。

世界には何千という言語があるのに対して、国家の数は200弱である。国内で1言語しか話されていないという国は少なく、10も20もの言語が話されている国はめずらしくない。100以上の言語が話されている国もいくつかある²⁾。

すなわち、多言語国家の方がむしろ多数派なのである。もっとも、フランスのようにフランス語という1言語が支配的である国においても、周辺地域においてはブルトン語、アルザス語、バスク語、カタルーニャ語、コルシカ語、フラマン語といった地域語が存在しているのも事実である。しかしながら、多言語使用のあり方は国によってさまざまである。カナダ、スイス、ベルギーといった国々では、場所によって使用される言語がほぼ決まっており、言語分布が属地的である。一方、アフリカの国々では状況が異なっている。多くのアフリカ諸国では、植民地時代の宗主国の言語である、フランス語、英語、ポルトガル語といったヨーロッパの言語が公用語となっているが、元々先住民の言語が数多く存在しており、それらが共存している。その共存の仕方は属地的ではなく、社会的使用域によって使い分けられている。梶（1993）は以下のように述べている。

[...] 多くのアフリカ人は多言語使用者である。一人の人間が3つや4つの言語を話すのはごく普通のことだ。これは決して、街の語学学校に通ったせいではない。村で焼畑農耕をやっているもそうなのだ。これを理解するには、言語の重層性を考慮に入れなければならない。つまり、アフリカでは、まず部族語があり、人々は普段これを用いて

生活している。しかし、この部族語というのは概して規模が小さく、自分の部族以外での通用度はほとんどゼロである。そして、そういう所では必ずと言っていいほど、共通語が発達している。つまり、部族語に覆いかぶさるように大きな言語が地域共通語 (lingua franca) として機能しているのだ (もっとも、大きな部族語が共通語になっていることも多い)。母語の異なる人々がコミュニケーションをする場合はこれで行なう。国によっては、こういった地域共通語を「国語」(langue nationale) と呼ぶこともある。ただし、こういった共通語が一つで全体をカバーするというはまずなく、いくつかあるのが普通である (従って、これを「国語」と呼ぶなら、一つの国の中にいくつもの「国語」があることになる)。そして、その上にさらに、旧宗主国の言語が「公用語」(langue officielle) として、あらゆる場面で用いられうる、と言うわけである³⁾。

このように、アフリカの国々においては、「部族語」、「国語」、「公用語」という3層構造が存在しており、言語の分布が複雑であることが分かる。

フランス語と英語が用いられている8ヶ国は、「フランコフォニー国際組織」(OIF : Organisation internationale de la Francophonie) だけでなく、英語を軸とした国際機関である「コモンウェルス」(Commonwealth) にも加盟している。次にこの「コモンウェルス」について言及しておく。

3. コモンウェルスとフランコフォニー国際組織

コモンウェルスは世界で最も古い政治的国際機関の一つであり、イギリスが世界中に植民地を有していた大英帝国に遡る⁴⁾。フランスも世界の至るところに植民地を築いた点は同じであるが、フランコフォニー国際組織が植民地帝国からは断絶されており、アフリカ諸国が主導して結成に至っている点が大きく異なっている。

鳥羽 (2012) はコモンウェルスと異なるフランコフォニー国際組織の特徴として次の4つの点を挙げている。

- ・コモンウェルスがモザンビーク、ルワンダを除き旧イギリス領の諸国から成るのに対して、フランコフォニー国際組織には19世紀の

- フランス帝国に属していなかったメンバーが数多いこと。
- ・コモンウェルスが英王室を元首とする君主制を採用しているのとは異なり、フランコフォニー国際組織においては、フランスのような特定の国家が諸メンバーを統率すると規定はされていないこと。
 - ・主権国家でない地域もフランコフォニー国際組織ではメンバーの一員になり得ること。
 - ・フランコフォニー国際組織には経済的に恵まれない国が多いこと⁵⁾。

コモンウェルスには2021年現在世界の54の国々が加盟している。鳥羽(2012)が挙げている3つめの特徴にあるように、フランコフォニー国際組織は国だけでなく州などの地域単位でも参加を認めているため単純に比較はできないが、この数はフランコフォニー国際組織のメンバーとなっている国・地域の数と同じである。ただし、フランコフォニー国際組織には準メンバーとオブザーバーの枠もあり、合計で88ヶ国が参加している⁶⁾。

コモンウェルスの加盟国は以下のとおりである⁷⁾。

アフリカ

- ・ボツワナ Botswana
- ・カメルーン Cameroun
- ・ガンビア Gambia
- ・ガーナ Ghana
- ・ケニア Kenya
- ・エスワティニ⁸⁾ Eswatini
- ・レソト Lesotho
- ・マラウイ Malawi
- ・モーリシャス Maurice
- ・モザンビーク Mozambique
- ・ナミビア Namibie
- ・ナイジェリア Nigéria
- ・ルワンダ Rwanda
- ・セーシェル Seychelles
- ・シエラレオネ Sierra Leone

- ・南アフリカ Afrique du Sud
- ・ウガンダ Ouganda
- ・タンザニア Tanzanie
- ・ザンビア Zambie

アジア

- ・バングラデシュ Bangladesh
- ・ブルネイ Brunei
- ・インド Inde
- ・マレーシア Malaisie
- ・モルディブ Maldives
- ・パキスタン Pakistan
- ・シンガポール Singapour
- ・スリランカ Sri Lanka

カリブ海および南北アメリカ

- ・アンティグア・バーブーダ Antigua-et-Barbuda
- ・バハマ Bahamas
- ・バルバドス Barbade
- ・ベリーズ Belize
- ・カナダ Canada
- ・ドミニカ国 Dominique
- ・グレナダ Grenade
- ・ガイアナ Guyana
- ・ジャマイカ Jamaïque
- ・セントルシア Sainte-Lucie
- ・セントクリストファー・ネービス⁹⁾ Saint-Christophe-et-Niévès
- ・セントビンセントおよびグレナディーン諸島
Saint-Vincent-et-les-Grenadines
- ・トリニダード・トバゴ Trinité-et-Tobago

ヨーロッパ

- ・キプロス Chypre

- ・マルタ Malte
- ・イギリス Royaume-Uni

太平洋

- ・オーストラリア Australie
- ・フィジー Fidji
- ・キリバス Kiribati
- ・ナウル Nauru
- ・ニュージーランド Nouvelle-Zélande
- ・パプアニューギニア Papouasie-Nouvelle-Guinée
- ・サモア Samoa
- ・ソロモン諸島 Îles Salomon
- ・トンガ Tonga
- ・ツバル Tuvalu
- ・バヌアツ Vanuatu

アフリカの国々が多い点はフランコフォニー国際組織と同様であるが、ヨーロッパの国々が少ない点や太平洋地域、カリブ海地域の国々が多い点はフランコフォニー国際組織と異なる。また、コモンウェルスのほとんどの国が英語を公用語または準公用語としているのに対し、フランコフォニー国際組織はフランス語が一般的に使用されていない国々も多く参加している。そのため、コモンウェルスの国々の中には、ガーナ、キプロスのようにフランコフォニー国際組織の準メンバーとなっている国や、ガンビア、モザンビーク、マルタのようにフランコフォニー国際組織のオブザーバーとなっている国も見られる。さらに、フランス語圏の国でフランコフォニー国際組織に参加していないのはアルジェリアのみであるが、コモンウェルスにおいてはアメリカ合衆国やアイルランドのような主要な英語圏の国が参加していない。ちなみに、アイルランドはフランコフォニー国際組織のオブザーバー国であり、アメリカ合衆国についてはルイジアナ州がフランコフォニー国際組織のオブザーバーとして参加している。

平野 (2014) は、フランコフォニー国際組織はコモンウェルスとさまざまな点で異なっているが、比肩されるものであることを指摘している。それによると、フランコフォニー国際組織の前身である文化技術機構

(ACCT : Agence de coopération culturelle et technique) の初代事務総長を務めたジャン=マルク・レジェは、コモンウェルスが政治的観点から形成されたのに対して、フランコフォニー国際組織は文化・言語を元にしており、その原理から根本的に異なっているため、この2つの組織の比較は適切ではないとしているが、文化技術機構の誕生に寄与したセネガル大統領レオポール=セダール・サンゴールやチュニジア大統領ハビブ・ブルギバは「フランス版コモンウェルス」(Commonwealth à la française) を明言しており、またレジェ自身、コモンウェルスの存在がフランコフォニー構想を与えていたことは認めているという¹⁰⁾。

以下では、フランス語と英語が共存する8つの国について見ていくことにする。

4. フランス語と英語が共存する国々¹¹⁾

4.1. カリブ海および南北アメリカ

4.1.1. カナダ Canada

北アメリカ大陸北部を占める世界第2の面積を誇る国である。公用語はフランス語と英語である。州ごとに公用語が定められており、フランス語を公用語としているのは東部のケベック州とニューブランズウィック州である。ケベック州はフランス語のみが公用語であり、ニューブランズウィック州ではフランス語と英語の2言語が公用語である。カナダのフランコフォニー国際組織への加入は1970年、コモンウェルスへの加入は1931年である。また、ケベック州もニューブランズウィック州も、カナダとは別にフランコフォニー国際組織に参加しており、ケベック州は1971年、ニューブランズウィック州は1977年に加入している。

1497年、イタリア人探検家ジョン・カボットがイギリス国王の援助で来航し、イギリス領を宣言する。1536年にフランスの探検家ジャック・カルティエがセントローレンス川を探検し、1608年に同じくフランスの探検家サミュエル・ド・シャンプランが東部にケベックを建設し、フランス領カナダの根拠地とする。その後、1763年にフランスとイギリスの植民地戦争の結果、パリ条約でカナダにおけるイギリスの支配権が確立する。1867年、イギリス領北米法により4州が参加してカナダ自治領が成立する¹²⁾。このように、フランス、イギリスの植民地を経ることにより、現在

のフランス語と英語の併用に至っている。

4.1.2. ドミニカ国 Dominique

カリブ海の島国である。公用語は英語のみである。フランコフォニー国際組織への加入は1979年、コモンウェルスへの加入は1978年である。

1493年、コロンブスが第2回航海で来航し、その日が安息日（ドミンゴ）であったためドミニカ島と命名される。1805年にイギリスの植民地となり、1978年に独立するまでイギリスの支配を受ける¹³⁾。フランスによる支配の記述は見られないが、フランス領であるグアドループ島とマルティニーク島に挟まれているため、両島からの影響を受けてフランス語が使用されているものと推測される。

4.1.3. セントルシア Sainte-Lucie

カリブ海の島国である。公用語は英語のみである。フランコフォニー国際組織への加入は1981年、コモンウェルスへの加入は1979年である。

1502年、コロンブスが第4回航海で来航する。1638年にイギリス人が入植を開始し、1651年にフランス人が入植を開始する。その後フランスとイギリスの間で争奪戦が展開され、1814年、ナポレオン戦争後にイギリス植民地として確定する¹⁴⁾。1979年の独立までイギリスの支配を受けたため、英語が公用語となっているが、フランスからの入植もあったためフランス語も使用されている。

4.2. 太平洋

4.2.1. バヌアツ Vanuatu

太平洋の南西に位置する島国である。公用語はビスラマ語、フランス語、英語である。フランコフォニー国際組織への加入は1979年、コモンウェルスへの加入は1980年である。

1606年、スペインの探検家ペドロ・フェルディナンド・デ・キロスが来航する。1774年、イギリスの海軍軍人ジェームズ・クックが来航し、ニューヘブリデス島と命名する。その後、1887年、フランスとイギリスでニューヘブリディーズ諸島の共同管理をする協定が結ばれる。1980年、バヌアツ共和国として独立する¹⁵⁾。その結果、フランス語、英語ともに公用語となるに至っている。

4.3. アフリカ

4.3.1. カメルーン Cameroun

アフリカ大陸中西部の大西洋に面した国である。公用語はフランス語と英語である。フランコフォニー国際組織への加入は1975年、コモンウェルスへの加入は1960年である。

1470年にポルトガル人が来航し、1868年にドイツ人が入植を開始する。1919年、第一次世界大戦でドイツが敗れ、東部はフランス、西部はイギリスの委任統治領として東西に分割される。1946年、第二次世界大戦後、フランス、イギリスの信託統治となる。フランスが統治する東部カメルーンは1960年にカメルーン共和国として独立、イギリスが統治する西部カメルーンは翌1961年に独立するが、北部がナイジェリアと併合、南部が東部カメルーンと合体してカメルーン連邦共和国となる¹⁶⁾。

現在カメルーンは10の地域に分かれているが、そのうち8つの地域がフランス語の地域で、ナイジェリアと国境を接する北西地域と南西地域の2つが英語の地域である。国民の75%から80%がフランス語の地域、20%から25%が英語の地域で生活している¹⁷⁾。このように、カメルーンにおけるフランス語と英語の分布は属地的である。

4.3.2. ルワンダ Rwanda

アフリカ大陸中東部の内陸国である。公用語はルワンダ語、フランス語、英語であり、スワヒリ語も使用されている。フランコフォニー国際組織への加入は1970年、コモンウェルスへの加入は2009年である。

15世紀ごろツチ族による王国が成立する。1890年、ドイツ領東アフリカとなる。1916年、第一次世界大戦でドイツが敗れ、ベルギー領コンゴの属領となる。1924年にベルギー委任統治領ルアンダ・ウルンディ、1946年にベルギー信託統治領ルアンダ・ウルンディとなる。1962年、ルワンダ共和国として独立する¹⁸⁾。ベルギーが宗主国であったことから公用語はオランダ語の可能性もあったがフランス語の方が採用されることとなる。

しかしながら、1994年からのジェノサイドに絡んで、ベルギー、フランスとの関係が悪化したことから、2009年に英語が公用語に追加され、フランス語に代わって教育言語の地位を得ている¹⁹⁾。同時にコモンウェルスに加入することになるが、歴史上イギリスの支配を受けることなくコモンウェルスに加盟している国は既出のとおりルワンダとモザンビーク²⁰⁾だ

けである。

4.3.3. セーシェル Seychelles

インド洋西部に位置する島国である。フランス語と英語が公用語となっている。フランコフォニー国際組織への加入は1976年、コモンウェルスへの加入も1976年である。

1502年にポルトガルの探検家バスコ・ダ・ガマが来航する。1756年にフランス領となり、当時の蔵相の名からセーシェルと命名される。1815年、ナポレオン戦争にフランスが敗れ、イギリス領モーリシャス属領となる。1976年、セーシェル共和国として独立する²¹⁾。このようにフランスに続いてイギリスに支配されることにより、フランス語と英語が併用される状況が生じている。

4.3.4. モーリシャス Maurice

インド洋西部に位置する島国である。公用語は英語のみであるが、フランス語とクレオール語が広く使用されている。フランコフォニー国際組織への加入は1970年、コモンウェルスへの加入は1968年である。

1507年にポルトガルの探検家ペドロ・デ・マスカレーニャスが来航する。1715年にフランス領フランス島となる。1810年にイギリスに占領され、1814年にイギリス領モーリシャスとなる。1968年、イギリス連邦の一員モーリシャスとして独立する²²⁾。このようにフランス、イギリスによる統治を経て、フランス語と英語が共存するに至っている。

5. おわりに

本稿では、フランス語と英語が使用されている国々について概観した。8ヶ国が該当し、すべての国がフランコフォニー国際組織とコモンウェルスに加盟していることが分かった。ほとんどの国が歴史上フランスとイギリスの両国に統治されたことにより、フランス語と英語の2言語併用に至っているが、中にはドミニカ国のようにフランスの支配を受けていない国やルワンダのようにイギリスの支配は受けておらずベルギーの植民地であった国も見られる。

これらの国々について以下に簡単な表にまとめる。

フランコフォニーとは何か (4)

| 地域 | 国名 | 公用語 | 独立年 | 旧宗主国 | OIF 加入年 | コモンウェルス 加入年 |
|------------|--------|----------------------|--------------|--------------|------------|----------------|
| 南北 アメリカ | カナダ | フランス語 英語 | 1867 | イギリス | 1970 | 1931 |
| | ドミニカ国 | 英語 | 1978 | イギリス | 1979 | 1978 |
| | セントルシア | 英語 | 1979 | イギリス | 1981 | 1979 |
| 太平洋 | バヌアツ | ビスラマ語 フランス語 英語 | 1980 | フランス イギリス | 1979 | 1980 |
| アフリカ | カメルーン | フランス語 英語 | 1960 1961 | フランス イギリス | 1975 | 1960 |
| | ルワンダ | ルワンダ語 フランス語 英語 | 1962 | ベルギー | 1970 | 2009 |
| | セーシェル | フランス語 英語 | 1976 | イギリス | 1976 | 1976 |
| | モーリシャス | 英語 | 1968 | イギリス | 1970 | 1968 |

8ヶ国のうちカナダ、ドミニカ国、セントルシア、セーシェル、モーリシャスの5ヶ国が独立直前にイギリスの単独統治を受けており、ドミニカ国を除いてはそれ以前にフランスによる入植が行われている。バヌアツはフランスとイギリスによって共同統治され、カメルーンは東部がフランス、西部がイギリスによって分割統治されていた。

これらの8ヶ国はフランス語圏と英語圏の両方の世界を知る貴重な存在であると言える。言語や文化の多様性が一層重要視される昨今、これらの国々の今後の動向に注目していきたい。

注

- 1) cf. かみゆ歴史編集部編 (2019), 外務省サイト「国・地域」(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html>).
- 2) 斎藤, 2010, p. 214.
- 3) 梶, 1993, pp. 315-316.
- 4) cf. The Commonwealth—Our history (<https://thecommonwealth.org/about-us/>)

- history).
- 5) cf. 鳥羽, 2012, pp. 66–69.
 - 6) cf. Organisation internationale de la Francophonie—88 États et gouvernements (<https://www.francophonie.org/88-etats-et-gouvernements-125>).
 - 7) cf. The Commonwealth—Member countries (<https://thecommonwealth.org/member-countries>). なお、国名の日本語表記については、外務省サイト「国・地域」、小学館クリエイティブ編 (2017) を参考にした。
 - 8) 2018年に国名をスワジランドから変更 (cf. 外務省サイト「国・地域」)。
 - 9) セントキッツ・ネービスとも呼ばれる。The Commonwealth のサイトでは St Kitts and Nevis で記載されており、東京2020オリンピックでも英語名はこの名称で紹介されていたが、日本語ではセントクリストファー・ネービスの名称で呼ばれ、外務省サイト「国・地域」でもそのように表記されているため、本稿ではこちらの名称で記した。
 - 10) cf. 平野, 2014, pp. 158–159.
 - 11) 各国の公用語については、外務省サイト「国・地域」とかみゆ歴史編集部編 (2019)、フランコフォニー国際組織とコモンウェルスの加入年については、それぞれの機関のサイトを参照した。
 - 12) cf. 莉安, 2017, p. 245.
 - 13) cf. 莉安, 2017, p. 259.
 - 14) cf. 莉安, 2017, pp. 256–257.
 - 15) cf. 莉安, 2017, p. 294.
 - 16) cf. 莉安, 2017, pp. 98–99.
 - 17) cf. DRESCHER, 2017, pp. 509–510.
 - 18) cf. 莉安, 2017, p. 155.
 - 19) cf. 鶴田, 2021, pp. 73–76.
 - 20) モザンビークはポルトガルの旧植民地であり、公用語はポルトガル語である。
 - 21) cf. 莉安, 2017, p. 118.
 - 22) cf. 莉安, 2017, p. 148.

参考文献

- 梶茂樹 (1993) : 「アフリカとフランス語」, 『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, pp. 313–331.
- かみゆ歴史編集部編 (2019) : 『世界の国々』, 朝日新聞出版.
- 莉安望 (2017) : 『世界の国旗・国章 歴史大図鑑』, 山川出版社.
- 斎藤純男 (2010) : 『言語学入門』, 三省堂.

フランコフォニーとは何か (4)

小学館クリエイティブ編 (2017) : 『最新 世界大地図』, 小学館.

鶴田綾 (2021) : 「ルワンダのコモンウェルス加盟をめぐって」, 『中京大学国際学部紀要』, 1, pp. 73-88.

鳥羽美鈴 (2012) : 『多様性のなかのフランス語』, 関西学院大学出版会.

平野千果子 (2014) : 「フランス版コモンウェルスとしてのフランコフォニー」, 『コモンウェルスとは何か—ポスト帝国時代のソフトパワー—』, ミネルヴァ書房, pp. 141-165.

DRESCHER, Martina (2017) : « Cameroun », *Manuel des francophonies*, De Gruyter, pp. 508-534.

参照サイト

外務省

——国・地域 (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html>) [2021年10月15日閲覧]

The Commonwealth

—— Member countries (<https://thecommonwealth.org/member-countries>) [2021年10月15日閲覧]

—— Our history (<https://thecommonwealth.org/about-us/history>) [2021年10月15日閲覧]

Organisation internationale de la Francophonie

—— 88 États et gouvernements (<https://www.francophonie.org/88-etats-et-gouvernements-125>) [2021年10月15日閲覧]